

会議録（要点筆記）

| | |
|--|---|
| 会議名 | 「まいばら福祉のまちづくり計画」の中間評価ワーキング 基本目標 I |
| 開催日時 | 平成29年1月30日（月）9：30～11：00 |
| 開催場所 | 米原市役所 山東庁舎別館2階 会議室2AB |
| 公開・非公開 | 公開 |
| 傍聴人 | なし |
| 出席者 | 出席委員：4人 樋口委員、森委員、西秋委員、福永委員 |
| | 事務局：9人 市：堤くらし支援課長、高木課長補佐、西村、亀山、高橋（社会福祉課） 市社会福祉協議会：田中地域福祉課長、村山課長補佐、中川、伏谷 |
| 件名 | (1)「まいばら福祉のまちづくり計画」の中間評価について 【資料3】 基本目標 I 「つながりを深める取組の充実」についての振り返り |
| 内容（概要） | |
| <p>1 目的</p> <ul style="list-style-type: none"> 市では、市民一人ひとりが住み慣れた地域や家庭で自立し、心豊かな生活が送れるよう、共に支え合う地域社会を計画的かつ総合的に推進するため、平成26年度から平成30年度までの5か年計画として「まいばら福祉のまちづくり計画」を策定している。 今年度は、平成26年度から計画に基づく取組を始めて2年が経過し、この間実施されてきた取組を振り返って、今後の2年間につなげていこうとするもの。 昨年11月9日に第1回地域福祉計画推進会議を開催し、委員から活発な御意見をいただいた。 会議では限られた時間内に議論しきれない状況だったため、ワーキングを設けて議論する。 ワーキングは基本目標ごとに3日間（1/23、1/25、1/30）に分けて実施しており、本日は最終日になる。 <p>2 内容</p> <p>基本目標 I つながりを深める取組の充実</p> <p>(1) 福祉の基礎を磨きます</p> <p>① 福祉・人権・共生を学ぶ機会の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 社協 自治会ごとの地域福祉懇談会一年々、開催する自治会は増えている。 複数回開催する自治会も増えている。 福祉懇談会は認知症について学習している。認知症は自分のこととして関心があるが、人権、障がいに関する勉強会の機会は十分でない。 福祉事業者 市の出前講座に講師登録、社会福祉大会に参加。 企業等 認知症啓発に関する勉強会 市社会福祉課 伊吹山中学校で障がい福祉についての出前講座。障がい福祉の伝え方 | |

は難しい。手話。

- ・ 家族は地域とのつながりを求められないケースが多い。
- ・ 地元の民生委員にも相談されない。
- ・ 大野木の地域福祉懇談会の参加者は少ない。中身の工夫が必要。企業の参加はない。
- ・ **地域の中にある事業者と地域のがほとんどない。**
- ・ 市の人権学習
 - ・ 生涯学習課を中心として、人権推進員に年1回ハートフルフォーラムを実施してもらうよう依頼している。
 - ・ 内容はビデオ学習がほとんど。
 - ・ 自治会によって工夫しているところもあるし、開催されていない自治会もある。場をつくるだけではだめ。地道な活動が必要。
- ・ 団体の長になると福祉会に出ないといけないから嫌。福祉は大変というイメージ。
- ・ 福祉会の役員は1年で交替する。イベント会社になっている。日常的につながっていかない。
- ・ やらされているのと自分でやろうというのでは違う。
- ・ 自治会以外のインフォーマル組織が必要と感じているが立ち上げるのが難しい。
- ・ 2人いたら自分の奥さんと4人になる。→組織が作れる。
- ・ 人権に関する作文
 - ・ 農協広報紙「ふれあい」に中学生の立派な作品が載っている。
 - ・ なかなか書けなくて困っている子どもが多い。重荷。
- ・ 良い作品を見る機会が必要—大人の学習の機会に活用したらどうか。
- ・ 市で作成される冊子等どのように活用されているのか。有効活用する方法が大事。
- ・ 子どもは人権週間に学校で学ぶ機会がある。子ども一思っていないなくてもできる。
- ・ 日々の暮らしに生かせるかが大事、表面だけではだめ。
- ・ ルールを守らない子どもを注意すると被害者になる。弟が転んでも兄は知らんふり。
- ・ 中高生—道いっばいに広がって車が来てもよけない。子どもたちのモラルの低下。
- ・ 学びと現実の乖離がある。
- ・ まず第一に自分を大切にすることが分かっていない人が多い。

(1) 地域や人のつながりを深めます

① 地域社会への参加の促進

- ・ 社協—サロン活動助成。
- ・ 地域では、サロン・お茶の間が広がっている。
 - 主体は地域住民。違いが分かりづらいので、整理が必要。
 - 高齢者が中心になっているが、子どもも入ってこられるとよい。
- ・ 居場所づくり活動は広がっている感覚。(お茶の間、冒険あそび場、子ども食堂)
- ・ 福祉事業者は地域の中でどうしていくか会議を持つようになった。

地域密着型事業所—推進会議は定例的にしているところもあり、開催する意識がでてきた。運営についての話を中心になっている。

- ・地域の中では、この人どこの人？地域の中でさえ誰なのか分からない。
- ・亡くなった人の情報を新聞で知る。
- ・昔ほど集まる機会がない。
- ・家の中でも会話ができていない。
- ・三世代家族でも皆がそろふことが少ない。
- ・若い人はつながりが必要ないと思っているわけではない。
- ・人との付き合い方がわからない。苦手な人も多い。核家族で育った人は特に。
- ・地域の中で個人個人がつながっていくことが必要。つながる機会が減ってきた。
- ・個人（お客さん）とのつながりは大事にしている。
- ・企業が地域とつながる活動の相談支援
- ・女性—話し合うのは好きだが組織的にするのは嫌。共通の問題意識持ちにくい。
- ・させられるという感覚になる。話の合う人がいれば、よしやろう！という気になるが、仲間を見つけるのも難しい。
- ・つながり—財産＝外へ出て行って自分を知ってもらふ。→安心感につながる。
- ・つながる機会←参加しない人（身体的・精神的事情）への関わり

明らかになってくるのが重要。

- ・人に関心を持つ人がたくさんいたらいい。
- ・民生委員の一つの役割、民生委員だけではない。
- ・大野木の成功例を市内各自治会へ広めていくべき。見よう見まねだけではなく、地域の困りごとを話し合う場面から活動へつなげる。
- ・自治会長—興味のある人ない人で異なる。
- ・フォーマル—区民全員が同じ方向を向いてもらわないといけない。時間がかかる。
- ・インフォーマル—自分たちでやりたいことを即実行できる。タイムリー。
- ・互助の中にもフォーマルとインフォーマルが必要。
 - ・放課後児童クラブ—世話をする人の育成が必要。

県の研修があるが人数に制限があり、十分ではない。

- ・子ども食堂を発展させていきたい。指導者をどうするか考えている。今の子どもに対する接し方を知りたい。
- ・適切な支援をするために地域での学童は可能か？
- ・あいさつ運動—組織としてやっている。地縁の人が活動してくれたらいい。
- ・大野木豊年太鼓踊り—子どもは全員参加。あいさつ、礼儀が身に付く。

道で会っても挨拶する。

伝統行事に参加することは貴重。

出て行った人も、祭りの日には帰ってくる。

- ・子どもの時に習ったことは身につけている。地域の結びつきができる。

・ふるさと郵便局—出て行った人へのアプローチ

- ・ 3日間実施したワーキングの内容をもとにして、3月初旬ごろの推進会議に中間評価のまとめをしていきたい。

以上